

「金持ちの男」

2022年03月24日

するとその人は、「先生、そういうことはみな、少年の頃から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物売り払い、貧しい人々に与えなさい。そうすれば、天に宝を積むことになる。それから、私に従いなさい。」彼はこの言葉に顔を曇らせ、悩みつつ立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。(マルコ福音書10章20節～22節)

主イエスが道を歩いておられると、ある人が走り寄り、ひざまずいて、「善い先生、永遠の命を受けるためには、何をすればよいでしょうか」と尋ねた。彼は丁寧な態度で、神と共に生きる、充実した日々の生活はどのようにしたら得られるでしょうかと、息せき切って問うた訳である。主イエスは、彼の言葉と服装と振舞いから、彼の持つ問題の全てを見抜かれた。「なぜ私を、『善い』と言うのか。神おひとりのはかに善い者は誰もいない」と、私を「善い先生」などと言うが、善い方は神おひとりだと、冷水を浴びせかけるような言葉で応じられた。そして、「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父と母を敬えという戒めをあなたは知っているはずだ」と言われた。主イエスが、モーセの十戒を守って「永遠の命」を受けるなどと言われたことはない。主イエスの律法理解は、例えば、「殺すな」という戒めに関し、「兄弟に腹を立てること」、「馬鹿とか愚か者と言う者」は裁きを受けると、律法の文字ではなく、心の奥底を問題にされている。ところが、彼に対しては、律法を平面的に羅列しておられる。すると、案の定、「先生、そういうことはみな、少年の頃から守っていました」と答えた。彼の着ている服は高価なもので、金持ちであることは一目瞭然である。そして、彼は安息日には会堂に行き、ファリサイ派の先生が解き明かす律法を聞き、それをひたすら守ってきた。真面目を絵に描いたような男である。近所の人々からは、あんな真面目で信仰深い人はいないと賞賛されてきただろう。彼は経済的に恵まれ、律法を守る誠実な生き方をしていたが、彼の心の中には、満たされない空洞があった。本当に愛する隣人がいない。自己充足した孤独の中で生きていた。だから、永遠の命を受けるには、どうすればよいかを問うたのである。主イエスは彼を見つめ、慈しんで、「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物売り払い、貧しい人々に与えなさい。そうすれば、天に宝を積むことになる。それから、私に従いなさい」と言われた。持っている物売り払い、貧しい人々に与えよという言葉は文字通りを受け止めることではなく、生きることに苦しんでいる人々に目を留め、彼らと分かち合う生き方をしなさいということである。そうすれば、隣人を得、生きている充実感が得られると言われたのである。「彼はこの言葉に顔を曇らせ、悩みつつ立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。」彼は今までの生活から抜け出すことができず、生暖かい布団の中に潜り込んでしまった。肩を落として、主イエスの前から立ち去った。

主イエスと出会った人々は大勢いる。弟子たちは感銘を受け、生活を捨てて従っている。初めから、敵意を持って向き合ったファリサイ派、サドカイ派の人々、ヘロデ党の人々もいる。彼らは殺意を持って、主イエスに対してなので、聞こうとする思いは全くない。教えを求め、また対話しようとして出会った人々もいる。この金持ちの男は誠実に教えを求めながら、教えを受け止められず、残念な別れをしている。この別れは、私たちの主イエスへの信従がどれほど実存を懸けたものであるかを問いかけている。